

お小姓児太郎

室生犀星

青空文庫

髪結^{かみゆい}弥吉は、朝のうちの呼びで、明るい下り屋敷の詰所で、稚兒^{ちご}小姓兒太郎の朝髪のみだれを撫^なでつけていた。快よい髪^{かみ}弄^{いじ}り^じで睡^ね不足の疲れが出て、うとうとと折柄^{ひざ}膝がしらを暖める日ざしに誘^{ねむ}われながら、い睡^{ねむ}りをつづけていた。

頸^{くび}すじが女のように白くたわわになり、梳^すき手の揺れをつたえ^えるごとに、弥吉の手ごたえを重くした。弥吉は、飽かずそれを眺めていたが、いかにも疲れ込んでいるらしい兒太郎の様子が、それとなくお宿^{とのい}直の、さまざまな取沙汰を思い出させた上、このよ

うに正体もなく居睡りをつづけていることが、軽い憎しみをさえ感じ出させた。生白い手をきちんと膝の上にかさね、それすら、ぐつたりと、累ね手の重みで感覚もないように見えた。お弓蔵近くの桜が白く晒されはじめ、詰所詰所では、うす睡い碁将棋の音も途絶えていた。

——或る日、ちようど弥吉が奉公してから一と月ほどあと、児太郎は、自分の部屋へ弥吉を呼んだ。

「無聊ぶりようだから盃をとらす……。――」

そう言われて始めて始めて弥吉は、詰所結いを望んで、児太郎の屋敷へ勤めたこと、鷹狩たかの、鞍くらヶ岳の池で始めて児太郎を見たことなどを話した。そのことも、何時いつの間にか児太郎にはわかっていた

らしかつた。行燈あんどんのかげで、静かに微笑わらつてみせ、自分でわざと酒をついでやったりした。そういう情事じやうじになれている児太郎は、高たかびしやに弥吉を眺め下ろしていた。「爪を剪きつてくれい。」そう主人の命いいつけ附つけを酔った手つきで、白脛すねの投げ出されたときは、実際からだが震えるほど、ぞつと嬉しかつた。「下手だの。お前のおを出し。」そういう主人を、弥吉は、あわてて手てで遮さへぎつた。

「勿体ない。」

「いや関わぬ。指を出せ。」

児太郎は、自分の白い手の上に、若者の指を乗せ、ポツンと深爪を剪っていたが、みな肉が切られ、あかいものが滲にじんで出た。弥吉は指頭こしらをしたたる血と、その痛みを泳こらえるため顔を歪ゆがめて

いた。

児太郎は、弥吉の苦しそうにしている様子をみると、慘酷にかい微笑をうかべながら、しまいに興もなさそうに手をつき放した。——主君利治公の御寢所で、ある晩、肩揉もみをしていて、爪があたつていけない、どの爪だと、これも血のにじむ深爪を切られたことを思い出したのである。その自分が弥吉をこうするのは、べつに悪いことだとは思わなかった。

「弥吉、肩をあたれ。」

「はい。」

弥吉は、日頃思っている主人の、優やさ肩がたに手を触れる快適さに身をふるわせ、肩につかまっていたが、爪さきが痛んで、指頭が立た

なかつた、「どうした、利かないじやないか。」兎太郎はそう叫ぶと、煩^{うる}さそうに肩さきを振つて、弥吉の手を払つた。

「指さきが痛むというのか、これしきのがなんだ。」

兎太郎は、手を叩^{たた}いて近侍を呼び、鞭^{むち}を持たさせた。近侍がびくびくさし出した三尺なめしの鞭は、弥吉の、脊すじに向つて激しく打ちのめされた。弥吉は、絶え入るような声で、あたりをのた打ち廻つた。ふゆーと鳴る音がすると、からだじゅうの肉地が一どきに裂けるような痛みを感じた。怨^{うら}めしげに兎太郎を見あげると、その真赤な顔は、百万石の主君の寵^{ちようあい}愛^{あい}をほしいままにしているだけ、わけても逆上^{のぼせ}気味で美しかった。振り上げられた二の腕の鮮かな白さが、うめき声を上げながらも、なお執^{しゆうね}念^{ねん}く

目に残った。

「弥吉、いたむか。」

鞭を投げ出した児太郎は、そういうと、弥吉を抱き起した。ふしぎな発作のあとの、さざりとした児太郎の顔は、やや蒼褪め、あおざ凄艶せいえんとして震えて見えた。

「お怨うらめしゅうございます。」

弥吉は、あまりと云えば無理な主人だ。いつそ飛び菟かかつて白い喉のど笛ふえを食い切つてやろうかとまで、劇しい忿怒ふんぬにかられていた。

「弥吉、これを見い。」

児太郎は、くるつと脊後うしろ向きになると、肌を脱いでみせた。美しいふた峯の脊すじに、幾すじとない紫色を帯びた鞭の痕あとが、逡

巡としてまざまざと残っていた。

弥吉は、一と目みるなり身ぶるいを感じた。そしてうつ向いて
涙ぐんだ。なみだ 兎太郎は昂奮こうふんしていたが、こんどは落ちついていた。
しばらくしてから、弥吉は、顔をあげると、

「もつとお打ち遊ばせ。」

そう微笑んで言った。兎太郎は、頭を振って、きゆうに女のよ
うに笑うと、強う、弥吉の目をさし覗のぞいた。

「予がからだを自由にせい。よいか。」

兎太郎は、寂しげな、しかも慣れた目付をしながら、それが常いっ
も女のような姿をしつらえているように、立って弥吉の肩をそつ
と叩いた。弥吉は静かに女性にみることでできない、いわば齒

がゆいような凜りんとした美しい顔をあげた。

「ついて来い。」

児太郎は、そのまま部屋へはいった。間もなく弥吉は、主人の
××××××××××のである。

——弥吉は、それからそれへと考えているうち、児太郎の惨忍な性情が日増しに募っていることが感じられた。鞭打ちなどより、慄毛おぞげの立つような恐ろしい目に会ったりした。が、弥吉には、それが又不思議に、そうされるごとに、却かえつて児太郎の美しさを滲しみ込むように体内に感じるのだった。そういう不思議な発作ほおのあるごとに、児太郎の上気した、さつと鮮紅を帯びた頬ほおは、いつも

弥吉を恍惚こうこつとさせた。それに何時いつの間にか慣れてしまったせい
か、静かにしているときの主人より、凶暴なときの児太郎がかれ
の総すべてを刺戟しげきしたからである。

弥吉は、髪のはつれをすっかり仕あげると、居睡りをしていた
児太郎はうつとり目をさました。

「つい睡しまつて了しまつた。ご苦労だつた。」

弥吉は、髪道具を前に、きちんと隔へつて坐まつて、優しゆう疲れ
ている児太郎の、それゆえなお美しく見える目をみつめていた。
いつになく児太郎は上機嫌であつた。そういう日は殿宵どのいの首尾も
それと察せられ、弥吉は、とうてい容れられない妬ねたましさに、じ
りじり心を苛いらだ立てていた。

「今宵参つても苦しくないぞ。」

児太郎は、機嫌にまかせ、どうしたら彼あいう目になるだろうと思われるくらい、艶つややかに光をうるませ、微笑んで自分でうなずいて見せた。が、弥吉は……対手あいてのそういう好意のあり過ぎるときに、ちよいと気持ちちが沈んでならなかつた。

「いえ、今宵は参りませぬ。ゆるりとお休みあそばせ。」

児太郎は、すぐ顔色を変え、声とがを尖らせたのである。

「なぜ参れないというのだ。匹夫ひつぷのくせに口が過ぎるぞ。」

「いえ、お疲れでございましょうと存じますので。」

弥吉は、恐る恐る、一つには児太郎を休ませるつもりだったが、児太郎は、すぐ真赤になって怒り出した。

「無礼なことを云う奴だ。殿づとめするのを嫉やきおるか、たわけ。」

弥吉は、そうでない意味を言いあらわそうとすると、額口を扇子でびしつと打叩かれ、巻きかえし打すえられた。弥吉は、そのまま縁側に手をついたなり、俯うつむ向いてしまった。磨きをかけた縁板に、児太郎の小姓袴ばかまの銀縫いの影がちらついていた。口が過ぎたのだ。言わなければよかつたと、後悔が正直一閃な彼を流涙させた。

「汝等うじごとき蛆虫うじが分に過ぎた言い分だ。弥吉、面を擡あげい。」

「はい。」

児太郎は、そのとき故意わざと声を低め、やや微笑をふくんだ眼眸

を弥吉にそそいで言った。

「そちにも予が殿づとめするのを苦しく思うか。」

弥吉は、からか 揶揄うつもりで左そういう児太郎であるか、それとも本気でいうのか、確めようと眼をさしのぞいたまま、急には返事をしなかつた。

「返事をせい。」

弥吉は、しかたなしに

「左様にございます。」

そう答えた。児太郎は、弥吉の苦しそうにしている眼を、自分が難題を持ちかけたためだと思い、興きんがった。

「嫉妬しつとの情は人間にあるものだ。そちもそれに駆られて居るのだ

ろう、包まず言うたらよいぞ。」

「いえ、そのようなことは御座いません。」

「では予をそちは思わぬのか。」

兎太郎は、また嚇かつとして睨にらまえた。弥吉はどう言っているか分らなかった。どう言っても歪まげられて了しまうのが何時いつもの言葉癖ゆえ、黙もくつてうつ向むいた。そして低い声で、うつ向むいたまま答えた。「左様なことはございません。御主人様を束の間も忘れたことはございません。」

兎太郎は、それきり奥の間へ黙もくつて這はい入いってしまった。弥吉はぼんやり坐まつて、このごろは唯呵か責やくと折せ檻かんよりしか兎太郎から受けない彼は、なおそこから脱だつけ切れない自分を自分で呪のろうて

いた。ときには思い切つて屋敷をぬけ出そうと心構えしても、やはり未練があつた。そう言つても、これ以上勤めることは彼にとつて日夜耐えがたい苦痛であつたのである。弥吉は、檻詰めにされた優しいけだもののように、馴れるなに従つて卑屈になつていた。

二

夏が過ぎ、水の澄み工合がきまると、町の諸方から刀研師とぎしが呼び出され、腰の物お手入れが始まりかけていた。児太郎の屋敷でも、あぶら引きを済ましておさめられた刀剣類のなかに、児太郎は、主馬寮しゅめりょうにいる父親がするように、十八歳のかれにしては老

人くさいような坐り方をして、焼きと光とから玉走る刃がしらの匂いをかいでいた。

弥吉は、あぶみばこ 鐙櫃のほこりを烏毛さいはいで、ぱたぱた払って

いた。丸腰の、武家には珍らしい町人腰に前垂れをしめ、新しいてぬぐい手拭をあたまに着けている姿は、どこか、意気で、なよろしげに児太郎にはながめられた。実際、いつも女役のかれにとつては、ふしぎに相手に、××××××××××最中は、かえって快感が多かった。弥吉の、何でも無い後姿が、習慣のせいかな、児太郎を刺戟した。重い刀剣類を朝からいじくり廻したため、手の平のあぶらがつかいと柄糸に吸い取られ、かさかさしているほど、目も疲れ込んでいた。

児太郎は鋭い一本の、研ぎの入った小柄に似たようなものの手入をすましかかったが、その薄手の刃がしらは、ナイフのように、ものの内部に刺し徹とおされる味いを、しらずしらず刺戟していた。

「弥吉。これは何か知っているか。」

児太郎は、その小柄こづかのようなものを差し出して見せた。

「馬刺剣でございました。そのように思われます。」

「戦場で用立てるものかの。知っているか何どうじゃ。」

「馬斃たおれんとするとき、それを馬の尻につき立てて気附するものでしょう。」

弥吉は、そう答えたとき、なぜか、しまったという気がした。

それは、児太郎の目のいろが粗暴な荒れ方をしながら、がちがち

震えていたからである。

「よく知っているの。」

そう言つて、凝然として見成つて見られている児太郎は、しだいに、その眼底に髟髟ほうふつする焦燥をありありと燃え立てさせた。弥吉は、からだの竦すくみを感じた。——三角に削り立てられた鋭利な馬刺剣は、四寸くらいの長さで、きらりとキツ先きを、畳の上に向けられ、いまにもぷつぷつりと畳目にさし徹されるような気がした。

「弥吉、これへ来い。」

その目いろは最早や疑いもなかったため、弥吉は、鏡櫃に、にわかにはいはいを入れはじめた。

「これを済してから参ることにいたしとうございます。最早、日

脚もあの通りでございますから……。」「

庭後の、植込みのあたまにうすら日がちらついたまま、間もなくその影をおさめようとしてい、踏石のまわりの土もいくらか夕湿りを催しかけ、褐色に沈んで見えた。

「いや、ならん。これへ来いと申したら来い。」

弥吉は、震えた。が、つぎの瞬間には、児太郎は、大きな弥吉のからだを羽搔はがい責めに抱きすくめ、馬刺剣は、その××××××××××××。弥吉が、小さい叫び声をあげたときには、児太郎は、馬刺剣を拭きながら立っていた。

弥吉は、つつ伏していたが、控え部屋へ手当をしに立つて行った。一言も言わなかった。

兎太郎は、蒼あおざめた顔をゆがめ、悪いことをしたときの窮屈な冷笑をうかべながら、馬刺剣を庭木の肌を目がけ投げつけた。李すもものいらいらした肌にぴいんと立ち、蜻蛉かげろうのように震え、やがて停つた。兎太郎は、病的にちかい目と手つきとから静まって、冷たい縁側にぺたりと坐つた。弥吉は、とうとう来なかつた。虫がひいひい啼ないている、あたりは暮れかけはじめていた。

「なぜ其方そちは逃げ出したのだ。それほど痛むか。」

兎太郎は、ふたたび弥吉が部屋へはいつてきたとき、そう言いながら、顔を歪ゆがめている弥吉を見成つた。その顔は卑屈にしびれ切つて、眼底かすに微かな反抗がうずまいていた。

「無調法をお目に停らせると恐れ入りまするので、あちらへ参り

ましたのでございます。」

「ふむ。」

児太郎は、それきり何にも言わなかつた。頭が静まると、次第に自分のしたことに、いつものような後悔が募り出すのを感じたのである。

「痛むか。」

「いえ。」

弥吉は、わざと元気に立ち働いて、部屋じゆうに散らばつた物を片付けはじめた。が、ときどき苦しそうに腰部をさすりながら、児太郎を偷み見た。^{ぬす}その目の底に燃えるような憎念がたぎりぎらついていた。

「其方、斯様な目に遭つて無念に思わぬかな。」

「すこしも思ひませぬ、よく御存じ上げて居りますから。」

「では、予が為ることを先き以つて存じていると言うのだな。」

「何となく感づくことがございます。」

そういう弥吉の目には、測り知れない例の憎念が、微笑んでいるに拘わらず、児太郎の目に停らぬ程度で現われていたのである。とうてい叶わない諦めもあつたが、それにしても消えがたい底強い光が潜んでいたのである。

「弥吉、殿勤めはつらいぞ。」

児太郎は、左うという後悔の念を今はハッキリと面にあらわした。弥吉は、黙つてうつむいていた。

三

そのうち不思議にも、児太郎の乱行は、ぱたりと止やんだ。そのかわり殿宵の勤め泊りの声も、おかみからは下りなかつた。夜は、ほの暗い行燈と虫声の繁い屋敷うちに、児太郎は端然と寂しく坐っていた。弥吉は、それを知ってから、なるべく児太郎に顔を合さぬようにした。

弥吉は、鞍ヶ岳の池のまわりで、そよりと立った鷹狩の、児太郎の可憐かれんな姿を、いまは何処どこにもみることができないのに気が附いた。ふしぎにお小姓は、長くて三年の器量といわれているだけ

に、もう児太郎の顔容は、その目つきばかりでなく、コワそうなうす青い髭ひげの芽生えからも落ちかかっていた。その何よりも荒れ沈んだ眼底には、しおらしゅう匂う色艶がいつの間にか搔かき消されていたのである。弥吉は、そういう児太郎の沈んだ姿を、下座敷のなかに、夜はいつも何ごとをか考え込んでいるのも見た。それと同時にふしぎに弥吉の心にも、何となく児太郎を慕う気が起らなくなっていた。呵責と折檻とから放されたような彼にとつて、思いしずんでいる主人を時にはこころ宜よいまで復讐的な気分でながめていたのである。

或る晩、髪を上げてくれるようとのことで、弥吉は、そのうしろに立ち、鏡立てをした児太郎が静かに心沈むという風に、それ

を覗^{のぞ}き込んでいるのを、例によつて、むしろ投げ遣^やりな気もちでながめた。

「お上からのお召しも遠いようでございますのは、心がかりに思
います。」

弥吉は、そう多少皮肉な気分で言つて、しずかに髪^{くし}の地に櫛^{くし}を
入れた。

「いや、そのうちであろう。上は忙しくあらせられるからの。」

児太郎は、新参の大隅という、二つ年下の、鶯^{うぐいす}のような声音^{こわね}を
している小姓仲間を思い出した。その出仕と同時に自分への沙
汰のなくなつたことを考えると、なよろしゆう立働いている大隅
が憎くてならなかつた。

「弥吉、そちは大隅をみたことがあるかどうかだ。」

弥吉は、瘠やせてはいるが、今小姓仲間の孔くじやく雀といわれている大隅を、そう言われて急に思い出した。なぜか児太郎とくらべものにならない気がした。

「ぞんじて居ります。」

「予といずれが際立ち居るか。つつまず申して呉くれ。」

弥吉は、すぐ返事ができなかつた。そのため、立鏡にうつる自分の顔をわざと鏡の外側へずらせた。が、そのとき児太郎はそれを素早く見つけた。

「どうじゃ。」

「はい。」

児太郎は、その隙間すきまにぐさりと突き込んで言い放った。

「予の方が劣るか。」

弥吉は、こう言い乗せられると、益々ますますあわてて吃どもつて、あいに、喉絡のどまりをした声がかすれて出なかつた。

児太郎は、立鏡を足で蹴り上げた。裏切りものめ、そう叫んだ。児太郎は、髭かもしにかけた弥吉の手をとると、いきなり庭さきへ叩たたきつけた。起上ろうとするのを上から乗り寄せ、丁々ひたいと額を打った。弥吉は、唇を嚙かみしだきながらも、手向いをしなかつた。そして正面から児太郎の顔をゆっくり凝視みつめ、冷えわたるような笑みを漏もらした。

「児太郎様にくらべると、大隅さまはずっと立派に居られます。」

兎太郎は、身うごきもせず、そう大胆に言い退ける弥吉の顔をむしろ呆然とながめた。その口惜しさは一どきに頭を混乱させ逆上させた。はんたいに気持ちは落ちつき返っていた。

「そちでも左う思うか。」

「はい。」

弥吉は、そのときどういう酷い目に遭うかわからないと思つたが、却つて冷然としている主人をみると、自分があまり急所を衝きすぎたような気もした、一面から凋れている兎太郎にたいする日頃の鬱憤がいくらかずつ晴れてゆくのを快よく感じた。

「部屋へ下つてようございますか。」

曾つて然う言い出したことのない弥吉を、兎太郎は自身にひき

あてて、悲しげに打棄うちすてるような調子でしりぞけた。——弥吉は、部屋へかえると、通しをかけてあつた大隅への奉公口の返事を、
口くちいれ入業のある町家まちやをさして出かけて聞きに行つた。どうせ浮いた髪結業だ。それにこの屋敷にいる気がしなかつたからであつた。

翌朝、弥吉が暇乞いに出かけると、児太郎は、黙つて、それを許した。そのとき主人は最早や稚児袴を着けずに、わざとらしく鉄扇を持ち、座敷に坐り込んでいた。弥吉は、冷笑をふくんで、児太郎の屋敷を立ち出でた。

青空文庫情報

底本：「書物の王国※」[#丸8、1-13-8] 美少年」国書刊行会

1997（平成9）年10月15日初版第1刷発行

底本の親本：「室生犀星未刊行作品集」三弥井書店

1986（昭和61）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：岡村和彦

2014年5月14日作成

2014年11月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お小姓児太郎

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>